

今回の教育実習は、教員という職業の責任の重さ、やりがい、そして授業をすることの難しさを強く実感するものであった。全校集会や学級での緊張に満ちた挨拶から始まり、目の前のことに必死になりながら、研究授業、最終日まで流れるように三週間を駆け抜けたが、その中で確かに多くのことを学び、貴重な経験ができたと思う。

印象的だったのは、先生方の生徒への真摯な向き合い方である。忙しい中でも、どの問題も先生方同士で情報共有を欠かさず解決に向かう姿や、厳しく指導する姿を見ていると、根底には必ず「生徒のために」という想いがあることが伝わってきた。反抗的な生徒に対しても諦めることなく接し、問題が起きれば遅くまで多くの会議を重ね、生徒一人一人に丁寧に対応する教育現場を間近で見て、教員という仕事の奥深さと尊さを学ぶことができた。

授業に関しては、自身の未熟さとともに、国語という教科の難しさと魅力を実感した。担当した授業は3クラス、計14コマで、毎回生徒の反応や雰囲気が異なり、同じ内容であっても学級によって授業の雰囲気や進度は大きく変わった。生徒たちの反応が良かった授業もあれば、生徒の私語が多く集中力に欠けてしまった授業、静かすぎて反応がなく、生徒が眠ってしまう授業もあった。自分の授業で生徒が寝てしまうことはこんなにも悔しいのかと痛感した。

また、授業における「つかみ」で最初にどれだけ興味を持たせるかが、その後の集中力に直結することは、大学で学んだ通りであり、実践できた部分が多かった。しかし、教科書を読み始めた途端に寝てしまう生徒もいた。生徒の集中を引き続けるためには、「つかみ」の部分だけでなく、常に話し方の工夫や反応へのリアクションが必要であると学んだ。

研究授業では、論説文の本文を一通り学習した後の、筆者の主張の内容を実際に体験することで、主張をより深く理解するというワークや言語活動に取り組んだ。発展的な内容であったことや、直前まで内容が定まらなかったこともあり、不安ばかりであった。研究授業後は、指導教員や校長先生からは、新しいことに挑戦する姿勢を評価していただいた。ただ、生徒の反応を読み切れずに準備不足を痛感する場面や、生徒の意見の拾い方が未熟であり、今ひとつ生徒たちが積極的に取り組みきれない部分もあり、今後への課題が明確になった。

授業を通して、国語の授業は構成や進め方の自由度が高く、それが魅力である反面、初めて授業をする身としては難しさでもあった。何をどう教えるか、どこまで考えさせるか、生徒にとって最適な構成が何か、毎回悩みながら授業準備にあたった。今後は経験を積み重ね、生徒の姿から授業を組み立てていける力をつけたいと強く思う。

生徒との関わりにおいては、最初は戸惑いがあったものの、話しかけてみれば思いのほか生徒たちは反応してくれた。特に担当ホームルーム学級では、交流の積み重ねにより徐々に距離を縮めることができたと感じた。ただ、話しかけてくれる生徒とは自然と関係が深まった反面、自分から声をかけないと接点が取りにくい生徒もいた。もっと早くから意識的に全員に目を向け、関係を築いていくべきであったという反省がある。

短い期間ではあったが、生徒の印象は毎日変わり続けた。様々な場面を通して見られる生徒の新たな一面をもっと知りたいと思った。また、そのように授業内に留まらず、様々な場面を通して生徒を知ることや関係を築くことは、学級に合わせた授業をすることにも直結しているのだと思った。

今回の教育実習では、楽しかったことや嬉しかったこと、悔しかったこと、反省したこと、のどれもが、今後教員を目指す私にとって意味を持つ経験であると思えた。三週間を通して、教員として大切にすべき視点や心構えを数多く得ることができた。今回の経験を活かし、生徒が主役であることは当然のことでありながらも、自らも学び、挑戦し続けられる教員を目指すべきであると思った。